

Z世代の日本人女子学生の
パーソナルスペース

——対象との関係性と対象の性別による特徴——

Personal Space among Japanese Female College
Students in Generation Z

——Influence of Relationship with the Subject and the Subject's Gender——

山田 雅子

YAMADA Masako

Z世代の日本人女子学生の パーソナルスペース

——対象との関係性と対象の性別による特徴——

Personal Space among Japanese Female College Students in Generation Z

——Influence of Relationship with the Subject and the Subject's Gender——

山田 雅子

YAMADA Masako

要旨：本研究では、令和の時代を若者として生きるZ世代の日本人女子学生たちが各種の対象との間に保ちたいと感じる距離（パーソナルスペース）を、オンラインによる投影法調査によって捉えた。結果として、親や仲の良い友達に対するパーソナルスペースには全体の共通性が高く、特に母親と同性の友達に対しては肩が触れるほどの近接した距離も許容されることが分かった。また、数値化後のデータに対して、対象との関係性および対象の性別を要因とした4×2の分散分析を行った結果、各要因の主効果のみ有意であった。対象が親や親しい友達である場合には、対象の性別に関わらずパーソナルスペースは小さくなり、対象が異性である場合には、対象との関係性に拠らず一貫してより広くパーソナルスペースがとられる傾向が確認された。さらに、数値化データに対するクラスター分析（非階層型k-means法）により4つのクラスターが抽出され、それぞれ、〈近接許容群〉（約65%）、〈関係による距離変化顕著群〉（約26%）、〈父親距離確保群〉（約6%）、〈親との距離確保・異性回避群〉（約3%）と解釈された。

キーワード：パーソナルスペース、個人空間、対人距離、対人コミュニケーション、Z世代

1. はじめに

2020年の新型コロナウイルス感染症の世界的流行以降、数々の新語やこれまで然程目にする事のなかった語が頻繁に使用されることとなった。「三密（さんみつ）」、「不要不急」、「人流（じんりゅう）」、「マスク会食」など枚挙に暇がないが、ソーシャル・ディスタンス（英語ではsocial distancing）も、COVID-19発生後に流布した語の一つと言えよう。当該語を通じ、感染拡大を防ぐためには人と人との間に十分な距離（2m以上）をとるべきであることが喧伝された（例えばNHK, 2020）。しかしながら、この「ソーシャル・ディスタンス」の語はその後、感染拡大防止の標語の座から徐々に退いていくこととなる。世界保健機関（WHO）の働きかけにより、2020年4月以降は「ソーシャル・ディスタンス」に替わって「フィジカル・ディスタンス（英語ではphysical distancing）」の使用が推奨されるようになったのである。その変化の背景には、「ソーシャル・ディスタンス」という表現では、心理的な距離、社会的な隔たりの推奨をも感じさせる懸念があったとされる（東京新聞, 2022）。社会的・心理的にはつながりを保ち、飽くまで物理的にだけ他者と距離をとるべきであるということを示すため、「フィジカル・ディスタンス」という言葉が用いられるようになったというわけである。

だが、「フィジカル・ディスタンス」という語の浸透を待つまでもなく、我々人間は元来無暗に他者に近づくものではない。自身の身体の周辺に自身の空間として保ちたいスペースがあり、相手との関係性等によって件のスペースの取り方を微妙に調整している。当該スペースは「パーソナルスペース」として知られ、Sommer（1959）によれば、「人が持つ自分の身体を中心とする個体空間で、個人の身体を取り囲んでいる目に見えないからだの延長で境界線を持った領域であり、侵入者が入ることを好ましく思わない個人的な領域」と定義される。Hall（1966）やHayduk（1983）など、他にも各種の定義が存在するが、齋藤（2011）は複数の定義に共通する点として、「人の体を取り巻く泡のような空間であり、その人と共に持ち運ばれ、さまざまな人間関係をより円滑に行うために伸縮するような性質を持っているということ」を挙げている。

また、パーソナルスペースについては、親密ゾーン（自分の身体の半径50センチくらい）、対人的ゾーン（同50～100cmくらい）、社会的ゾーン（同1～3m）、公的ゾーン（同3m以上）の4つの区分けがなされ、各ゾーンに入ることが許容される対象は限られていることが指摘されてもいる（Hall, 1966）。親密ゾーンであれば恋人や家族などの親しい人物、対人的ゾーンは友人や知人などの親しい人物、社会的ゾーンはフォーマルな人間関係、公的ゾーンは個人的な関係が成立しない人物が対象とされ、当該スペースと心理的な意味との密接な関連が示されている（Hall,

1966)。さらに、相手との親密度だけでなく、本人の性、相手の魅力や年齢（池上・喜多, 2007）、身を置く空間の大きさ（小西, 1986, 橋本ら, 1996）、コミュニケーション能力（齋藤, 2011）による影響も指摘されている。このように個人内でも変動する要因がある上、各種の特性によって個人間でもパーソナルスペースの取り方に違いが生じると考えられる。

本研究は、これらの特徴を持つパーソナルスペースについて、現代を若者として生きる日本人女子学生たちの特徴を記述することを目的としたものである。現在の学生の多くは2000年以降に誕生しており、いわゆるZ世代に含まれる。1980年頃から1990年代中盤生まれのY世代（ミレニアル世代）に続く世代として名付けられたZ世代は、1990年代中頃以降に生まれた世代のことを指し（例えばリクナビNEXTジャーナル, 2022）、インターネットが完全に普及した中で生まれた「デジタルネイティブ」でもあるため、その価値観や行動には様々な面で注目が集まっている。本研究における「デジタルネイティブ」であることの意味としては、対面に拠らない対人コミュニケーション手段が豊富に揃う中で育ってきたということが挙げられる。Z世代誕生のスタートとなる1990年代以降、携帯電話やスマートフォンが1人1台という頻度で当たり前のように持たれるようになり、メールやチャット、各種のメッセージ機能やテレビ電話機能など、直接顔を合わせなくとも人と交流できるツールが選べるようになった。物心つく段階で当該手段が溢れる状態に身を置いてきた世代には、人との距離の取り方にそれ以前の世代との違いがあるということも全く考えられないことではない。本研究では、当該世代にあたる日本人女子学生たちによる対人的な距離の取り方を捉え、過去の研究において得られてきた傾向との比較を図る。

2. 方法

2.1 対象者

関東在住の日本人女子学生245名（18～20歳）

2.2 調査時期

2022年10月17～20日

2.3 調査方法

オンラインアンケート（Google Forms使用）

2.4 調査内容

パーソナルスペースの取り方について、8種の対象（①父親・②母親・③仲の良い同性の友達・④仲の良い異性の友達・⑤同性のクラスメイト・⑥異性のクラスメイト・⑦知らない同性・⑧知らない異性）が接近してくるとき、どこまで許容できるかを回答させた。実際の教示文は、「①～⑧のそれぞれの相手があなたに近づく場合、どこまで許容できますか？ A～Gの中からそれぞれ選んでください」とした。回答にあたっては次のイラスト（Figure 1）を参照させ、最左端の人物を自分自身としたときの距離をA～Gの七者の中から選択させる形式をとった。つまり、本調査では横方向のパーソナルスペースを問うたことになる。なお、調査実施時には全体の回答傾向を統計的分析対象とすることを対象者に断り、了承を得た。



Figure 1 パーソナルスペース回答時の目安¹

3. 結果および考察

3.1 基本統計量

各対象に対する距離として選択された結果は、次のFigure 2のようになった。②母親と③仲の良い同性の友達、④仲の良い異性の友達と⑤同性のクラスメイトのように、比較的近い関係性においては、隣り合う棒グラフ同士が類似する傾向が読み取れる。当該傾向は、相手の性別がパーソナルスペースのとり方に強い影響を及ぼすことを表し、「同性であること」が関係性による距離の規定を凌駕する場合があることが推測される。

さらに、Aの距離を1、Gの距離を7として数値を充て、各対象について選択された距離の平均を算出した。結果、次のTable 1に示す基本統計量が得られた。①父親や④異性のクラスメイトに対しては比較的標準偏差が高く、Figure 2においても回答が統一的でないことが確認できる。また、⑦⑧の知らない同性・異性に対しては標準偏差が高く、ばらつきが大きいことが分かる。

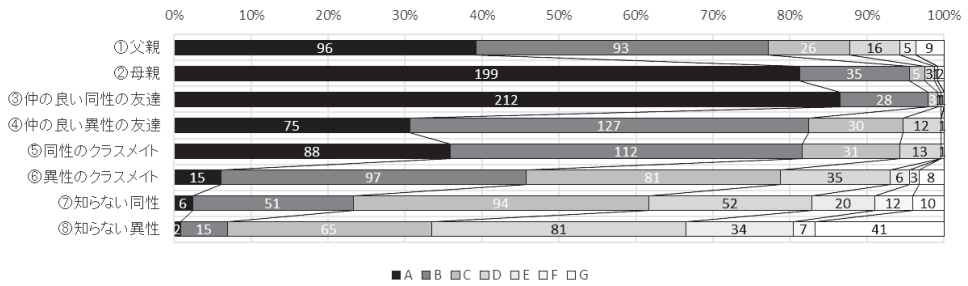


Figure 2 各対象に対して選択された距離

Table 1 各対象に対する距離平均

対象 (Target)	平均 (Average)	標準偏差 (Standard Deviation)	最大値 (Maximum)	最小値 (Minimum)
①父親	2.090	1.364	7	1
②母親	1.286	0.784	7	1
③仲の良い同性の友達	1.167	0.488	5	1
④仲の良い異性の友達	1.935	0.852	7	1
⑤同性のクラスメイト	1.894	0.890	7	1
⑥異性のクラスメイト	2.841	1.223	7	1
⑦知らない同性	3.429	1.328	7	1
⑧知らない異性	4.286	1.507	7	1

※ 数値はAの間隔を1、Gの間隔を7とした場合の値

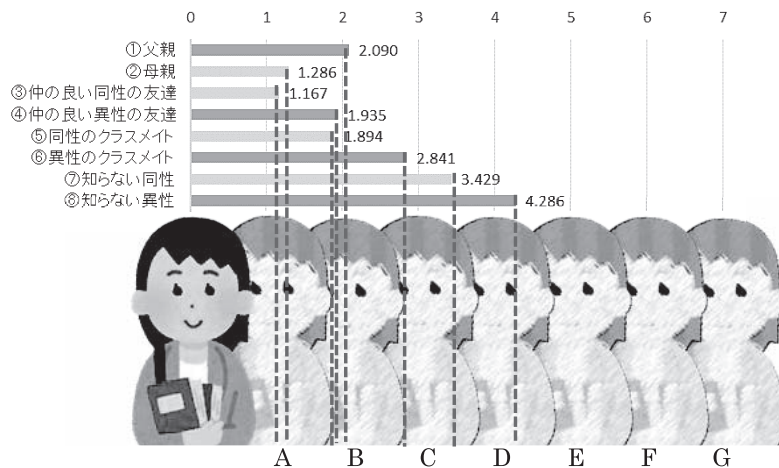


Figure 3 各対象に対する距離平均

Figure 3は、回答の平均距離を示した棒グラフに、目安として提示したイラストを組み合わせた図である。なお、異性の対象は濃い色、同性の対象は薄い色で示されている。

同じ親であっても、性別によって確保されるパーソナルスペースは大きく異なり、②母親に対しては非常に近接しても許容し、一方の①父親に対しては、④仲の良い異性の友達と同等の距離をとろうとしていることが分かる。友達についても同様の傾向が見られ、③仲の良い同性の友達に対しては非常に近接しても許容する一方、④仲の良い異性の友達に対しては、⑤同性のクラスメイトと同等の距離を確保しようとしていることが捉えられる。

3.2 接近対象との関係と接近対象の性別の影響

本調査では、家族、友人などの関係性と性別の2種の属性で距離をとる対象を定義することができる。そこで、対象との関係（4水準）と対象の性別（2水準）を要因とした4×2の分散分析を行い、各要因の影響を確認した。当該分析により求められた分散分析表は次のTable 2、各対象に対する平均を示すグラフはFigure 4の通りである。分析の結果、対象との関係 ($F_{(3, 1952)}=546.794, p<.001$)、対象の性別 ($F_{(1, 1952)}=348.943, p<.001$) 共、主効果が有意であった一方、2要因の交互作用は有意でなかった。

Table 2 分散分析表（関係4×性別2）

因子	平方和	自由度	平均平方	F 値
対象との関係	1640.381	3	546.794	448.246 ***
対象の性別	348.943	1	348.943	286.054 ***
関係 * 性別	2.234	3	0.745	0.611 n.s.
誤差	2381.151	1952	1.220	

※***p<.001

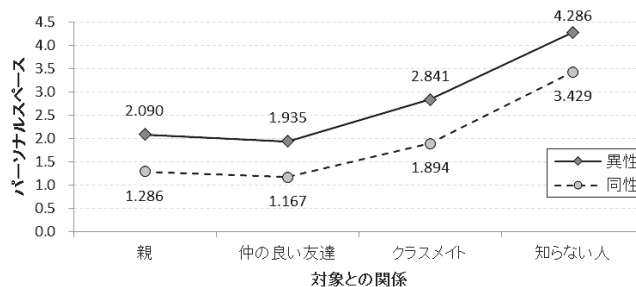


Figure 4 各対象とのパーソナルスペース

対象の関係の主効果は回答者と対象との関係によりパーソナルスペースが変化することを示す。多重比較検定の結果、4水準のうち、親と仲の良い友達との間には有意差は見られず、これら二者とクラスメイト、知らない人との間にそれぞれ有意差が確認された（いずれの組み合わせも0.1%水準において有意）。概して、親および仲の良い友人は四者の中でも保たれるパーソナルスペースが最も小さく、親≒仲の良い友達<クラスメイト<知らない人のように、対象との関係性に従って保ちたいパーソナルスペースが拡大することを示す。

また、対象の性別の主効果は、対象との関係性に拠らず、相手が異性であることによって一律にパーソナルスペースが拡大し、逆に相手が同性であることによって同スペースが縮小することを表す。同効果は、Figure 4において異性を示す◇マーカーの折れ線グラフと同性を示す○マーカーの折れ線グラフが一定の間隔を保ってほぼ平行となっていることから読み取れる。

渋谷（1985）の行った接近実験においても、女性が他者に近づく場合、相手との知り合いの程度と相手の性によって変化することが確認されており、未知の人物に対しては既知の人物に対してよりも大きなパーソナルスペースをとり、近づく相手が男性の場合は、相手が女性のときよりもより大きなパーソナルスペースをとることが指摘されている。接近実験とオンラインによる投影法調査という違いには留意する必要があるが、本研究において得られた、相手との関係と相手の性別の影響もまさに同様の傾向を示すものであったと言い得る。また、同研究では20代と50代の二者間の距離の計測結果についてもフィールド調査を基に報告されており、20代女性同士のペアの距離が他のペアに比して小さい特徴を持つことが指摘されている（渋谷, 1985）。本調査で得られたパーソナルスペース平均値においても、③仲の良い同性の友達が8つの対象の中でも最も小さく、既往研究における若年女性同士の特徴を支持する結果が得られたと言える。

3.3 クラスタ分析によるタイプ分け

パーソナルスペースの取り方のタイプ分けを目的として、8種の対象に対する数値化後のデータを用いてクラスタ分析を行った（非階層型k-means法）。この結果、4クラスタ抽出時に各項目における群間の有意差が確認され、相互に独立性のあるクラスタが得られた。各対象に対するクラスタごとの平均値はFigure 5-1からFigure 5-4、およびTable 3の通りである。

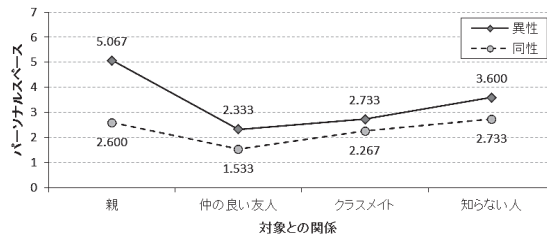


Figure 5-1 各対象とのパーソナルスペース (クラスターA)

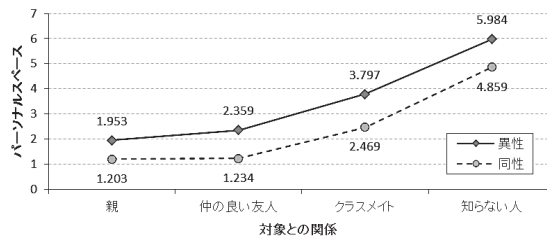


Figure 5-2 各対象とのパーソナルスペース (クラスターB)

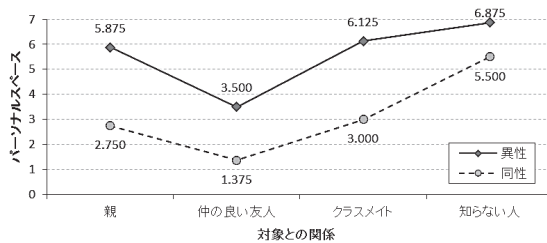


Figure 5-3 各対象とのパーソナルスペース (クラスターC)

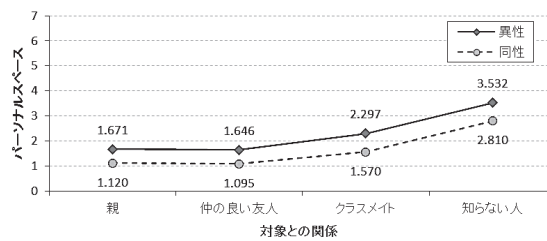


Figure 5-4 各対象とのパーソナルスペース (クラスターD)

Table 3 各クラスターのパーソナルスペース平均

	クラスターA	クラスターB	クラスターC	クラスターD
①父親	5.067	1.953	5.875	1.671
②母親	2.600	1.203	2.750	1.120
③仲の良い同性の友達	1.533	1.234	1.375	1.095
④仲の良い異性の友達	2.333	2.359	3.500	1.646
⑤同性のクラスメイト	2.267	2.469	3.000	1.570
⑥異性のクラスメイト	2.733	3.797	6.125	2.297
⑦知らない同性	2.733	4.859	5.500	2.810
⑧知らない異性	3.600	5.984	6.875	3.532

各クラスターの特徴抽出のため、クラスターごとに対象との関係・対象の性別を要因とする4×2の分散分析を行った結果、Table 4に示す傾向が確認された。対象との関係と対象の性別の交互作用が有意または有意傾向であったのは、クラスター A（5%水準）とクラスター D（10%水準）であった。しかし、その作用は若干異なり、クラスター Aでは対象の性別による距離の差が親において顕著に拡大することを示し、クラスター Dでは親や仲の良い友達のような近い関係において対象の性別間の差が縮小する、或いは、クラスメイトや知らない人のような関係性において性別間の差が拡大することを表す。

Table 4 各クラスターの特徴

クラスター	人数	構成比	対象との関係 主効果	対象の性別 主効果	2要因 交互作用	特徴
A	15	6.1%	***	***	*	父親との距離確保顕著
B	64	26.1%	***	***	n.s.	関係性による距離変化顕著
C	8	3.3%	***	***	n.s.	親との距離確保・異性回避顕著
D	158	64.5%	***	***	†	全般的に近接許容
全体	245	100.0%	***	***	n.s.	3. 2参照

※***p<.001, *p<.05, †p<.10

最も規模の大きいクラスター Dは、対象との関係や対象の性別によって若干の変化があるものの、Figure 5-4に表されるように全体としてパーソナルスペースが小さい群と言える。日本は米国に比して「非接触文化」とであると表現されてきたが（Barnlund, 1973, 曹・釘原, 2015）、相手の近接を比較的許容するクラスター Dのタイプが対象者全体の約65%を占めたことになる。20歳前

後の若年女性に限って考えれば、特に顔を知る相手（親～クラスメイト）に対して近距離での交流に抵抗がなく、知らない人物であってもCとDの中間程度の距離までは許容できると捉えている場合が半数を超えることになる（Figure 1参照）。次に規模の大きいクラスター Bは、Figure 5-2に示される通り、父親と母親に対するパーソナルスペースがクラスター Dと同程度に小さいことが特徴である。折れ線グラフの形状はFigure 5-4のクラスター Dと類似しているが、クラスター Dよりも右上がりの度合いが顕著であり、対象との関係や対象の性別によって大きく変化することが分かる。具体的には、クラスメイトや知らない人など関係の薄い対象にはパーソナルスペースが著しく拡大し、同性よりも異性に対してパーソナルスペースを大きくとる傾向が読み取れる。

3番目の規模となるクラスター Aは、15名だけの小さな群である。Figure 5-1においては①父親に対するパーソナルスペースが⑧知らない異性よりも広いことが他群にない大きな特徴となっている。その他の部分についてはクラスター Dのグラフの形状との類似が捉えられ、各対象の近接を比較的許容することが読み取れる。最小のクラスター Cは8名のみ小さな群であるが、同群の結果を示すFigure 5-3は◆と○のマーカを結ぶ2本の折れ線グラフの間隔が4図の中でも目立って広く、同性に比して異性に対して大きなスペースを確保しようとするのが他群に比べ顕著と言える。

これらの各クラスターの特徴を踏まえ、クラスター Dは〈近接許容群〉（約65%）、クラスター Bは〈関係による距離変化顕著群〉（約26%）、クラスター Aは〈父親距離確保群〉（約6%）、クラスター Cは〈親との距離確保・異性回避群〉（約3%）と命名した。

本研究では、Z世代にあたる日本人女子学生のパーソナルスペースの取り方の特徴抽出を目的に分析を進めたが、全体として、既往研究と大きく異なる傾向は捉えられなかった。しかし、調査手法により得られるデータの質が異なるため、直接的な比較が困難な部分があることも否定できない。例えば、本項で示したような小規模のクラスターの存在が、むしろZ世代を特徴づけるものとなる可能性も皆無ではない。本研究のみでは世代独自の性質を特定することはできないが、日本人女子学生という同質の対象に同様の調査を継続的に行っていくことで、新たな発見がもたらされることが期待される。

4. 今後の課題

本研究においては、他者が横方向に近づく場面を想定した上、図で示した間隔から最も当てはまるものを選択するという形式（投影法）をとった。質問紙で測定されたパーソナルスペースの方が実験による測定値よりも大きかったとの研究報告もあるが（渋谷, 1985）、本研究結果は実際の対人場面での距離の取り方を計測したものではないため、接近実験を行った際に異なる結果が得られる可能性が残ることは免れない。実際に実験場面を設けることによる緊張や気遣いといったノイズが一切影響しないというメリットも一方にはあるが、解釈の際には簡易的なオンライン調査による結果であるということを念頭に置く必要がある。

また、教示面での課題もある。相手が近づく場面や知らない人物の年齢など、本調査では詳細に設定しなかったが、回答者ごとに想定が異なった可能性は排除できない。「会話場面」「同年代の知らない異性」など、設定を厳密に示すことも今後検討すべき事項の一つと考える。

さらに、本調査では家族構成や同性・異性の友人関係等についても尋ねることはしなかった。本研究結果は、対象を限定せず無差別に調査した結果として捉える必要がある。今川（2010）では、父親や母親に対する女子学生のパーソナルスペースに自己開示・親和得点が影響することが確認されており、悩みを打ち明けたり相談したりする程度が高いほど、物理的に接近した距離をとる傾向にあることを指摘している。接近者との関係性のみならず、対象者個人が背景として持つ要素や感情面との連関については次段階の課題として取り組むこととしたい。

5. まとめ

日本人女子学生245名を対象として、パーソナルスペースに関する調査を行った結果、次のような特徴が確認された。ただし、以下の内容は実際の空間移動を含む接近実験から得たものではなく、心理的尺度を示した図による調査結果（投影法・横方向）であることに注意されたい。

- 1) 全体の傾向として親、仲の良い友達に対するパーソナルスペースの取り方には共通性が見られ、特に母親と同性の友達に対しては個人差が小さく、肩が触れるほどの非常に近接した状態でも許容する傾向にある。
- 2) 対象の性別によってパーソナルスペースの取り方は顕著に変化し、対象との関係に関わらず、

同性であればより小さく、異性であればより大きく距離を保とうとする傾向がある。

- 3) クラスタ分析（非階層型k-means法）により4クラスターが抽出され、それぞれの特徴から、最大規模の群は対象に拠らず全般的に近接を許容する〈近接許容群〉（約65%）、次に大きな規模で対象との関係による距離の変化が他群よりも顕著な〈関係による距離変化顕著群〉（約26%）、父親と大きな距離を保とうとする〈父親距離確保群〉（約6%）、両親や異性に対して他群よりも距離を保とうとする〈親との距離確保・異性回避群〉（約3%）に分けられる。

注

1. みふねたかし氏提供の「いらすとや」サイトのイラストを用い、距離の目安となる図を作成した。

参考文献

- 青野篤子「対人距離の性差に関する研究の展望－従属仮説の観点から－」*The Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, pp. 201-218, 2003
- Barnlund, D. C. "Public and Private Self in Japan and United States" Simul Press, 1973
- 曹美庚・釘原直樹「身体接触行動の異文化比較－日米韓の大学生の比較－」『日本心理学会第79回大会発表論文集』 p. 297, 2015
- Hall, E. T.著・日高敏隆他訳『かくれた次元』みすず書房, 1970(Hall, E. T. "The Hidden dimension" Doubleday, 1966)
- Hayduk, L. A. Personal space: Where we now stand. *Psychological Bulletin*, Vol. 94, pp. 293-335, 1983
- 橋本都子・西出和彦・高橋公子・高橋鷹志「実験による対人距離からみた心理的領域の平面方向の拡がりに関する考察」『日本建築学会計画系論文集』 Vol. 61, No. 485, pp. 135-142, 1996
- 池上貴美子「女子短大生の対人距離に関する親密性の要因の検討」*甲子園短期大学紀要*, Vol. 34, pp.1-7, 2016
- 池上貴美子・喜多由香理「対人距離に関する性・年齢・魅力・親密度の要因の検討」『金沢大学教育学部紀要（教育科学編）』 Vol. 56, pp. 1-12, 2007

- 今川峰子「大学生の親友・両親との関係と会話時のパーソナル・スペースの関連について」『中部大学現代教育学部紀要』 No. 2, pp. 35-47, 2010
- 今川峰子・讓西賢・齊藤善弘 「中年者及び高齢者の家族メンバーに対するパーソナル・スペースの検討」『発達心理学研究』 Vol. 11, No. 3, pp. 212-222, 2000
- 小西啓史「空間の大きさが対人距離に及ぼす効果について」『武蔵野女子大学紀要』 Vol. 21, pp. 149-154, 1986
- NHK NEWS WEB 「感染予防のための『ソーシャル・ディスタンシング』」 2020年4月2日
<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20200402/k10012364461000.html> 2022年12月閲覧
- リクナビNEXTジャーナル 「Z世代の特徴は？他世代との違いや仕事観なども紹介」リクルート
https://next.rikunabi.com/journal/20220630_t01_s/ 2022年12月閲覧
- 齋藤ひとみ「コミュニケーション能力とパーソナルスペースの関連性」『愛知教育大学研究報告 教育科学編』 Vol. 60, pp. 197-203, 2011
- 渋谷昌三「パーソナル・スペースの形態に関する一考察」『山梨医科大学紀要』 Vol. 2, pp. 41-49, 1985
- Sommer, R. Studies in personal space. Sociometry, Vol. 22, pp. 247-260, 1959
- 東京新聞TOKYO Web 「〈新型コロナ〉『ソーシャル・ディスタンシング』 → 『フィジカル・ディスタンシング』 人との距離、言い換える動き」 2022年4月25日
<https://www.tokyo-np.co.jp/article/17045> 2022年12月閲覧

